



人の世の百聞茶羅

百聞は一見に如かず

寿楽院本堂の額に入れて掲げてあります

この「人の世の百聞茶羅」絵図はまさに「百聞は一見に如かず」で生の世界と、死の世界が別々に存在するものではなく、実はすべてが一つの世界であること、そして人の世は生死がつまびらかでなければ、本当に安心して日々を送ることが出来ない……と、そう言う事を私たちに一目瞭然に教えてくれているのです。

天地の理法

また、その背景には梅、柳、桜、松、紅葉などの樹木で春、夏、秋、冬と自然の移り変わりがあつたり、つまり、所詮、人間は森羅万象、自然の摂理、天地の理法に、そむいては生きて行けないことをあらわしています。

死出の旅路

そして人の一生も自然の流れも、まったく同じ事で冬があれば春もある、苦あれば楽もある、どんな家庭でも子供が生まれれば、春が来たようになる。また、どんなに現在が楽しく幸せな毎日であっても、明日のことはどうなるか分からない。しかし、私たちはいずれ死ぬ事、これだけはハッキリしていると事です。したがってこの虹のかけ橋を渡っている人物は、皆、前へ前へと人生街道を歩んでおります。つまり日、一日が死への旅路と言う事にもなります。それだけに生きての間は一日一日、一刻一刻を大切に生きて行かなければならないと言う事を説いているのです。

最後に衣をつけている人

さて、このかけ橋の最後に衣をつけている人がいますが、これは人間が必ず死を迎える直前に心は仏の世界へと旅立つ事を現しています。

諸行無常

そして屍が動物たちについてばまれているのは、人間の肉体は所詮、自然から授かったもの、死んだときは自然に返ると言う意味なのです。

振り返っている人

ところでお気づきでしょうか、このかけ橋の人物はすべてが前に向いて進んでいますが、真ん中に一人だけ振り返っている人がおります。つまり、これが人生の折り返し点です。今までの生き方はどうであったか、本で自分が思ったことをやってみようか、そして、これからはどんな生き方をしたら良いかと、我を振り返り残された人生を、また気を取り直して進んでいきます。これは反省と改悔、勇気と希望をあらわしています。

日天と月天

空を見てください。日天と月天が出ております。これは私たちの人生には喜びが「日天」であれば、悲しみ「月天」もある、幸運があれば不運もある、プラスがあれば必ずマイナスがある、損をする事があれば得をする事もある、などすべて、この世は泣き笑い、陰陽の関係で成り立っていると言っていることをあらわしています。

三途の川・賽の河原・衣領樹等が描かれている。

八基の鳥居

良い心を常にはぐくみ生かして行くには、どうしたら良いか、と言う具体的な方法の答えが実はこの絵図に描かれています。

それは八基の鳥居です。

この八つの鳥居こそ仏教で言う八正道なのです。

八正道

- 一、正しく物事を見る
- 二、正しく物事を考える
- 三、正しい事を言う、悪口、雑言は言わない
- 四、正しい事をする、盗み、殺生、邪淫を犯さない
- 五、正しく生きる、規則正しい生活をする
- 六、正しい精神を持つ、常に正しい努力を勇氣を持ち、悪を除き善を助ける
- 七、正しく念ずる。常に正しくなるように信じ念じる
- 八、正しく定まる、正しい心を不動のものにする。という事です。そしてこの八つの鳥居は八正道さえ、守って実行していれば良心ははぐくまれ、素晴らしい人生を送る事が出来るばかりか、あの世へ行っても、必ず極楽へ行けると言う「いざないの門」だと言われています。